

SHOW HEY シネマルーム



Data

監督:成島出
原作:大鐘稔彦『孤高のメス』幻冬舎文庫刊
出演:堤真一/夏川結衣/吉沢悠/
柄本明/中越典子/成宮寛
貴/矢島健一/平田満/生
瀬勝久/松重豊/余貴美子
/太賀

👁️👁️ みどころ

09年7月、自公政権の「あた花」のように改正臓器移植法が成立したが、その20年前にある外科医が脳死肝移植を決行！場合によれば、殺人罪で起訴。そんなリスク覚悟で彼はなぜ？

1人でも多くの生命を救いたい！そんな純粋な思いは、先例踏襲に明け暮れる旧態然とした医療の世界を変えることができるの？今ドキ珍しい真正面からの問題提起を、しっかりと受け止めたい。

世界が激動した1989年！市民病院にも激動が！

本作の原作は、現職医師である大鐘稔彦氏の『孤高のメス』。これは幻冬舎から2007年に刊行されたシリーズ本だが、その時代設定はなぜか1989年。なぜ1989年を選んだのかは定かではないが、1989年といえば天安門事件が起き（6月4日）、ベルリンの壁が崩壊する（11月10日）など世界が激動した年。

そんな世界の激動に呼応するかのように、とある地方都市にあるさざなみ市民病院にも激動が！それは、当麻鉄彦（堤真一）という一人の医師がさざなみ市民病院に赴任してきたことによって起きたもの。その激動によって、医療改革、病院改革、そして人間の意識改革が実現したからすごい。ノホホンとした今の時代を生きる医師より、1989年という激動の時代を生きた医師の方が変革力を持っていたのかも？

当麻はなぜ、さざなみ市民病院に？

当麻は米国ピッツバーグで高度な医療技術を身につけた後帰国した優秀な医師だが、約

束された京葉医大での出世よりも地域の病院で1人でも多くの患者を救いたいという強い意志をもってさざなみ市民病院にやってきた。その直後、京葉医大で肝臓移植の研究に従事するため教授として赴任してきた、ピッツバーグ時代に当麻と同じ釜の飯を食べていた実川剛(松重豊)から「僕のライバルは君だと思っていた」と言われるほど優秀な当麻が、なぜ地方の市民病院に?そんな実川の質問に対する当麻の答えは、「僕にはそんな野望はありません」というものだった。また、当麻に惚れ込み、さかんに当麻を持ち上げる、さざなみ市長の大川松男(柄本明)に対しても、「僕は人の命を救いたいです」とあくまで一直線。彼が外科医になり、こんな生き方を実践しているのは「ある理由」からだが、それはあなた自身の目でしっかりと。

こんな医師がホントにいたら腐った医療の現場は変わるはずだが、さて現実には?そんな疑問はあるが、そこは映画と割り切って当麻の生きザマを見守りたい。作り話であっても観客をグイグイとスクリーン上にひきつけていくのが映画の力。手術室の中ではスーパーヒーローでも、当麻だったただの人間、普通の男。人間味タップリの面も随所で見せながら、映画は脳死肝移植のハイライトシーンまでグイグイ観客をひきつけていく。

人間模様がクッキリと!

公務員は「先例踏襲」ばかりだと批判されるが実は、先例踏襲が多いのはどの組織も同じでは?したがって、京葉医大から多くの医師を派遣してもらっているさざなみ市民病院が、京葉医大の顔色を伺うのは当然。また、外科医長として君臨していた野本六男(生瀬勝久)が、市民病院では手に負えない重症患者を京葉医大に回していたのも当然だ。もっとも、中村浪子看護師(夏川結衣)が残した日記に、「オベに立ち会うのがイヤ。看護師という仕事がイヤ」と書かれるほど、野本の手術がヘタクソだったというのは意外。本作前半に描かれるようなヘタクソなオベがなされていたら大変だが、手術室は密室だからそのまま隠ぺいされてしまう可能性が大きい。野本に手術をしてもらった患者が1年後に亡くなったのは、その手術に立ち会った青木隆三外科医(吉沢悠)が見れば明らかな医療ミスだ。ところが、そんな実力のないヤツに限って、人脈をたどった世間の遊泳術は得意だから始末が悪い。己の保身ばかり考えている事務長の村上三郎(矢島健一)といいコソビだ。

本作をきっちり理解するためには、どこにでもあるこんな人間模様を把握しておく必要がある。優秀、優秀と褒めそやされれば、それを妬む人間がいるもの。脳死肝移植に挑もうとしている当麻を陥れるため、あちこちにタレ込む実川の姿をみていると人間の浅ましさを痛感させられるが、残念ながらそれがどこにでもある人間模様だ。そんな中で当麻のようなストレートな生き方が、ホントにできるの?それが大問題。そしてそれは、映画鑑賞後一人一人がじっくり胸に手をあてて考えてみなければ・・・。

脳死肝移植をどう評価?

赴任早々、搬送されてきた患者に対して緊急オペの実施を決定し、鮮やかな技術でそれをなし遂げていく当麻の姿を見て、浪子や他のスタッフが感心したのは当然。しかし逆に、野本がこれを功名心目当てのスタンドプレーと批判したのも、ある意味当然だ。

したがって今でこそ施行例が増えている脳死肝移植を1989年の時点で、殺人罪で起訴されるかもしれないことを覚悟の上で決行した当麻を野本が非難したのは当然で、実川教授でさえ時期早尚と反対していたほど。むしろ、島田光治院長（平田満）やスタッフたちが当麻の主張に同意した方が異例だ。

万波医師との共通点は？

そんなストーリー展開を見ながらつい当麻とダブらせたのが、肝臓移植と腎臓移植とその対象こそ異なるが、病気腎移植で大問題となった宇和島徳洲会病院の万波誠医師。癌や肝炎、腎炎などに罹患している腎臓であってもこれを腎不全の患者に移植すれば救われる命があるとして、学会の猛反対にもかかわらず万波医師はそのオペを実施していたが、2007年にはついに彼の保険医登録を取り消す行政処分が検討されるまでになった。ネット情報によると、万波医師は「移植をしない患者には冷たい、移植後に問題が起きると途端に素っ気ない対応をする、頑固で人の助言忠告を聞こうとしない性格のために病気腎移植が繰り返されたなどという万波に対する評価がある一方で、万波に心酔する熱心な支持者もいる」とのことだが、さて万波医師と当麻との共通点は？

当麻は日本初の脳死肝移植を決行し成功させた後、さざなみ市民病院を辞めることになった。もちろん当麻ほどの技術があれば、どこの病院でも腕をふるうことができるだろうが、オペは一人の力ではなく集団でやるものだからチームワークが大切。万波医師は2009年12月30日宇和島徳洲会病院で、協力病院である広島県の呉共済病院とともに病気腎移植を臨床研究として再開したが、さて当麻が次の脳死肝移植の手術のためにメスを握るのはいつ？どこで？

誰がドナーに？

臓器の移植が成立するためには、臓器提供者（ドナー）の存在が不可欠。本作でレシピアント（臓器の移植を受ける患者）になるのは、議会で演説中に倒れたさざなみ市長だが、さてドナーは誰？

当初それは大川の娘でパパっ子の大川翔子（中越典子）だったが、それが実現すればそれは生体肝移植。つまり、健康な人の肝臓を部分的に切除し、レシピアントに移植するもの。これは翔子の自発的な意志で成立するが、血液型と肝臓のサイズが合わなければダメ。そして、翔子の場合は肝臓のサイズが合わなかったためダメ。そこで、たまたま交通事故によって脳死状態になった武井静（余貴美子）の一人息子武井誠（太賀）の肝臓を、母親の同意によって提供することになったわけだが、その心の葛藤が本作の見どころの1つだ。

それは、じっくりあなた自身の目で確認してもらおうとして、その法律上の問題点は？

臓器移植法の成立は？その改正は？

それを読み解くためには平成9（1997）年に成立した臓器移植法と、平成21（2009）年の改正法を勉強する必要がある。2009年8月30日の総選挙によって政権交代が実現したが、自公政権末期の2009年7月17日に自民党の中山太郎、河野太郎らの提案で成立したのが、改正臓器移植法。当初から他国に比べ臓器移植の臓器提供に関する制約が厳しいため移植数が伸びないとの指摘があり、脳死臓器移植の施術状況を考慮しながら、法律施行後3年を目処に見直すと言われていたにもかかわらず、10年以上経過しても脳死臓器移植の数が伸びず移植医療が停滞していたため、この改正が実現したわけだ。改正案を巡っては、いわゆるA案、B案、C案、そして折衷案たるD案が出され、異例の採決方法で結局A案が可決された。A案は「年齢を問わず、脳死を一律に人の死とし、本人の書面による意思表示の義務づけをやめて、本人の拒否がない限り家族の同意で提供できるようにする」というものだから、本作が描く脳死肝移植の手続きはこの改正法にそったものといえる。民社国連立政権がまともな国会運営をしていない今、あの時期に臓器移植法の改正法が成立したのは、自公政権最後のあだ花？

手術シーンに注目！肝臓ってこんなにデカイの？

弁護士が肉体労働なら、外科医だって肉体労働。弁護士は1つ1つの証拠を検討し、1つ1つの主張を組み立てていく地道な仕事だが、外科医のオベム「手編みのセーターをこつこつ編むようなもの」らしい。したがって、弁護士に必要なのは知識以上に体力と気力。私はいつも「1に体力、2に気力、3、4がなくて5に知力」と言っているが、それは当麻にもあてはまる。だって、脳死肝移植は述べ15～16時間を要する大手術なのだから。

本作最大の見どころは、リアルな手術シーン。これが実現したのは、特殊造型チームが作った本物そっくりの臓器のおかげだ。スクリーン上で見る、開腔された腹部に実際メスを入れる風景や、さまざまな道具を使って糸を結んでいく風景はリアルそのもので、思わず身を乗り出してしまう。こうなると、俳優も顔の表情だけの演技で済ますことはできず、手先の器用さが要求されるから大変だ。堤真一は、血管の縫い方を練習するキットを家に持ち帰り、撮影中も控えのイスに糸を結わえ、空き時間があれば結紮（けっさつ）の練習をしていたらしいが、その成果のほどはしっかりあなたの目で。

それにしても、肝臓があんなにデカイことにビックリ。また、誠の美しいピンク色の肝臓に対し、肝硬変となった市長の茶色に変色した肝臓にもビックリ。正常な肝臓と肝硬変の肝臓がこんなにも違うことがこんなにはっきりわかれば、アルコール摂取過多のためGTPが高いあなたも、少しは節制しようという気持ちになるのでは？

2010（平成22）年4月26日記